

GIO:

病理診断の実践を通じ、医療を適切に行っていく上で診断病理学が必要不可欠であることを理解する。なお、初期研修では、以下の1.)を前提としつつ、2.)に該当する者については、より長期的な視点に立ち、専門に特化した知識、技能、態度を身につけることをGIOとする。

- 1.) 臨床医をめざす者: 臨床像-画像-肉眼像-組織像を一連のsequenceとして理解し、自身の病態理解や診断能力の向上につなげる。
- 2.) 病理医をめざす者: 病理専門医の取得に向けた診断病理学の基礎を習得する。

SBOs:

- 〈病理診断〉 ・ 病理組織診断の役割と適応、限界を理解している
 - ・ 臨床的事項と病理診断との関連性を説明できる
 - ・ 臨床医に対して、病理診断に必要なかつ十分な病歴を求めることができる
 - ・ 一般的な悪性腫瘍のstaging, gradingを理解し、切り出しの意義を説明できる
 - ・ 一般的な外科病理検体の病理診断について、鑑別診断を含めて説明できる
 - ・ 一般的な外科病理検体に対して、適切な病理診断報告書を作成できる
 - ・ 病理診断における一般的な特殊染色の必要性を理解している
 - ・ 術中迅速組織診断の適応(意義)、手技、問題点、診断の限界を知っている
- 〈病理解剖〉 ・ 病理解剖の役割と適応について説明できる
 - ・ 臨床経過をもとに、病理解剖で観察すべき臓器所見について述べるができる
- 〈病理診断に関連する分子生物学的手法の理解〉
 - ・ 疾患の診断に関連する分子病理学について基礎的な原理と適応を知っている
- 〈細胞診〉 ・ 細胞診の適応、長所、限界を知っている
- 〈その他〉 ・ 病理検査室で従事者に感染しうる病原体を知っている
 - ・ BSLの学生指導ができる

方略:

- ・ 毎日の肉眼観察(切出し)から検鏡、報告書の作成まで文字通りスタッフに張り付いて業務を体験する。
- ・ 興味を持った症例を中心に、週4-5例程度を目安に、スタッフ指導の下、検鏡と報告書の作成を行う。
- ・ 興味を持った分野については、毎週行われる合同カンファレンスに出席し、プレゼンテーションを行う。
- ・ 病理解剖に原則全例参加し、systemicに病理、病態を考察する。

評価:

- ・ Evaluation system of Post graduate clinical training(EPOC)による評価を基本としますが、特殊な診療科であることから、個別の項目については弾力的に評価します。
- ・ 研修開始前、或いは開始時に研修指導医と面談を行い、目標の設定、共有を行います。修了時には評価表(自己評価及び病理診断科の指導体制等に関する評価を記載)を提出してもらいます。
- ・ ローテーション中に養成コース長による面接評価を行います。通常、自身が経験した症例をもとに、その報告書に対する試問という形式でほぼ毎日、日常診療の一部として行われます。